

第十三回 群英会ぐんえいかいにて蔣幹計しょうかんに中あたる、奇謀を用いて孔明箭やを借る

— 赤壁前夜 (二) —

(前回から今回まで)

周瑜は大船団を率いて出陣しますが、諸葛亮もこれに同行します。

一方で周瑜は、諸葛亮の智謀ちぼうに恐れをいだき、呉の禍わざわいにならないよう、諸葛亮と劉備を殺そうと図ります。しかし、諸葛亮は周瑜の企みをすべて読み切っていました。

まず、周瑜は諸葛亮に曹操軍の糧道りょうどうを襲わせて、曹操軍の手で諸葛亮を殺さるよう仕向けます。糧道襲撃の依頼を快く承知した諸葛亮は、私はどんな戦いでも得意なのでおまかせください、周瑜どののように一つしかできないのとはわけが違います、とわざと言います。それを伝え聞いた周瑜は、かっと頭に血がのぼり、諸葛亮に行かすまでもない、自分が曹操の糧道を断つてみせると言います。

ここで諸葛亮は、私に行かせようとしたのは、曹操の手で私を殺させるためでしょう、ちよつとからかったぐらいで腹をたてるようでは困ったものです、協力せずにはがみ合えば、勝ち目はありません、と魯肅から周瑜に言わせませす。

次いで周瑜は、相談したいことがあると持ちかけて劉備を呼びよせます。そして、兵士をひそませ、劉備が来たら合図をするから殺せと命じます。劉備は、関羽をお供に連れてやって来ます。周瑜は、関羽が剣を手に劉備の背後に立っているのを見て、誰かとたずねます。

劉備は弟の関羽だと答えると、周瑜はあの顔良と文醜ぶんしゆうを斬った者ではないかと怖気づき、暗殺を諦めますあきらむ。何も知らない劉備は、あとで諸葛亮から危険が迫っていたことを知らされ愕然がくぜんとします。

どこか笑いを誘うような周瑜の姿ですが、どちらの話も『三国志演義』のフィクションです。周瑜や魯肅など呉の英雄を、史実よりも貶めて描くのが『三国志演義』の特徴になっています。

今回はここからです。

前哨戦ぜんしょうせんと並行して、両陣營ぼうりやぐの謀略戦ぼりやくせんがはじまります。

緒戦じせんでは周瑜が曹操軍を破りますが、多勢に無勢のため、周瑜は一旦兵いったんを引き上げます。その後、みずから敵情を視察した周瑜は、荊州水軍の蔡瑁さいぼうと張允ちやういんが水軍の訓練をおこなっているのを見て、彼らは除かなければ曹操に勝てないと考えます。

ちようどその時、曹操はスパイを周瑜側に送り込みます。周瑜はそれを逆手さかてにとって、蔡瑁と張允を曹操の手で殺させようとしています。

曹操が送り込んだのは蔣幹しょうかんという人物で、周瑜とは幼いころの同窓の仲間でした。周瑜は蔣幹の目的を承知の上で、歓迎の大宴会をおこないます。周瑜は蔣幹に、呉軍の意気盛んな様子を見せ、大将たちを一人ひとり紹介しながら、この会を「群英会ぐんえいかい」と名づけようと言つて、宴会は夜ふけまでつづきます。

宴会が終わると、周瑜は蔣幹に今夜はいつしよに寝ようといい、正体なく酔っぱらったふりをして、先に寝てしまいます。

(本文抄)

周瑜は着た服を脱ごうともせず倒れ伏し、あたりに吐きちらすので、蔣幹はどうしても寝つけない。

二更しよくたい(午後九時から午後十一時の間)を知らせる太鼓が鳴ったので、起き上がってみると燭台しよくたいの火がまだ明るい。周瑜は、雷のような高いびきをかいている。

机の上に文書が積んであるので、こっそり調べたところ、すべて送られてきた手紙だった。

そのうちの一通には、「蔡瑁・張允、謹つしんで封ず」と書かれていた。

蔣幹がすばやく読むと、その手紙にはこう書かれていた。

「私たちが曹操に降伏いたしましたのは、出世栄達を求めたからではなく、やむをえない事情からでした。機会がありましたら、曹操の首をとつて献上いたします。近々使いの者をやり、また連絡いたします」

蔣幹は「蔡瑁と張允は呉に内通していたのか」と、その手紙を懐ふところのなかにかくした。ほかの手紙も読もうとしたとき、周瑜が寝返りをうったので、急いで灯あかりを消して寝台にあがった。

すると、周瑜が口のなかでもぐもぐと言った。

「子翼、もう二・三日したら、きみに曹操の首を見せてやるぞ」

周瑜はまた言った。

「子翼、待てというのに。曹操の首を見せてやるから」

蔣幹が声をかけようとする、周瑜はまた眠り込んでしまった。

四更しごう（午前一時から午前三時の間）に近づいたころ、誰かがなかに入ってきて来て、呼びかけた。

「都督、お目覚めでしょうか」

周瑜は寝ぼけた様子で、わざとその者にたずねた。

「私の寝台で眠っているのは誰だ」

「都督がいつしよに寝ようと子翼どのを誘われたのです。お忘れになったのですか」と、その者は答えた。

周瑜は後悔する様子で、

「私はこれほど酔っぱらったことはない。昨日、酔ったあとは記憶にないが、どんなことを言ったものやら」

と、その者は言った。

「江北から使いの者が参りました」

周瑜は「声が高い」と叱りつけ、「子翼」と呼びかけた。

蔣幹が眠ったふりをしてしていると、周瑜はこっそり外に出て行った。蔣幹が盗み聞きをしていると、外にいた者が、「張・蔡両都督が『すぐには手を下せない』と言っておられます」と言うのだけは聞こえたが、あとの言葉は聞き取れない。

やがて、周瑜が入ってきて、「子翼」と呼びかけた。蔣幹は応答せず、布団をかぶって寝

たふりをしていると、周瑜も横になった。

蔣幹は、「周瑜は、手紙がなくなつたことに気がつけば、私を生かしてはおかないだろう」と思い、五更ごこう（午前三時から午前五時の間）までじっとしていて、起き上がつて周瑜を呼んでみた。周瑜は眠り込んだままだつた。

そこで蔣幹は、足音をしのばせて外に出て、ただちに門から出ようとした。

番兵に「どこへ行かれるのですか」と聞かれると、蔣幹は答えた。

「私がここにいては、都督の邪魔になるので、いったんお暇いとまさせてもらうのだ」

蔣幹は引き返して曹操にお目通りした。

曹操は言った。

「首尾はどうだったかな」

「周瑜を説得することはできませんでしたが、丞相のお耳に入れたいことがあります。どうかお人払いを」と蔣幹は言い、手紙を取り出して、逐一ちくいち、曹操に報告した。

曹操は激怒して、「なめた真似まねをしおつて」と言うのと、ただちに、蔡瑁と張允を呼びつけた。

そこで、曹操が言うには、「今からすぐに、軍勢をだせ」

「まだ訓練が終わっていませんので、軽々しく出陣することはできません」と蔡瑁。

「訓練がすめば、わしの首を周瑜に渡すというのか」と、曹操は怒って言った。

蔡瑁と張允はわけがわからず、おろおろして答えることができなかった。

曹操は、二人を外へ押し出し、斬り殺させた。間もなく、首がとどいたとき、曹操はやつと気がついて言った。

「毘わなにはまったわい」

### (解説)

ここも『三国志演義』のフィクションですが、蔡瑁らが呉に通じていると曹操に誤解させて、殺させることに成功します。曹操は周瑜の毘わなだと気づきますが、あとの祭りでした。

周瑜が、その智略で曹操にいっぱい食わせます。

さて、ここで登場する蔡瑁と蔣幹ですが、実際の姿からは非常にかけ離れた描き方がされます。

蔡瑁さいぼうは荊州の有力豪族で、長姉ちやうしは黄承彦こうしやうげんの妻、次姉じしは劉表の後妻で、劉琮りゆうそうの母。諸葛亮の妻は黄承彦の娘なので、諸葛亮とは姻戚関係になります。

劉表が荊州の長官に着任すると、劉表に協力して側近として重く用いられます。『三国志』の注「魏晉世語」に、蒯越かいえつと共に劉備の命を狙ったという記述があります。

劉琮が曹操に降伏すると、蔡瑁はそのまま曹操に仕え、従事じゆうじ中郎、司馬、長水校尉ちやうすいこうゐを歴任し、漢陽亭侯かんやうていこうに封ぜられるなど榮達を果たしています。

したがって、曹操から水軍の指揮を任され、周瑜の離間策りかんさくにはまって殺されてしまうという事実はありません。

同じく、蔣幹についても、優れた弁舌を以て知られ、曹操の招聘しょうへいを受けます。また、周瑜とは旧知の仲だったので、周瑜を高く評価していた曹操から、周瑜を引き抜くように命ぜられます。蔣幹は揚州やうしゆうに赴き周瑜に面会しますが、周瑜は蔣幹の目的を察して、厚くもてなすとともに孫権への忠誠心を述べます。蔣幹はそれを素直に認めて、何も申し出ることもなく去った、とあります。

その時期は明示されていませんが、『三国志演義』は、右のエピソードを膨ふくらませて、「赤壁の戦い」前夜の一場面として演出します。

周瑜はこの自分の策略を諸葛亮が見抜いているか、魯肅を遣やつて確かめようとしています。



『三国志演義』前半の山場は、なんといつても天下三分決定づけた「赤壁の戦い」です。曹操・劉備・孫権が初めて顔を揃え、そこに諸葛亮・周瑜・関羽など錚々たるメンバーが加わって大活躍。まさにオールスター大集合です。

「赤壁の戦い」は『三国志』では簡略に記述するだけですが、『三国志演義』はそこに虚実取り混ぜて、様々な見せ場を作って話を盛り上げます。見せ場の多さは、この「赤壁の戦い」前後が頭抜けています。代表的なものをあげれば以下の通りです。

「草船借箭の計」、そうせんしやくせんのけい「苦肉の計」、くにくのけい「連環の計」、れんかんのけい「借東風」、しやくとうふう「義もて曹操を釈つ」等々、おなじみの場面が並びます。

「まえがき」で、虚々実々の駆け引きが『三国志演義』の魅力と書きましたが、諸葛孔明と周瑜、そのつなぎ役に魯肅を配して、彼らの駆け引きをフィクションで描きつつ、その背景には「赤壁の戦い」のドラマが配されます。『三国志演義』のなかでも、もっとも面白いところではないかと思えます。

次は、「草船借箭の計」の名場面です。

周瑜は、諸葛亮が蔣幹を使った計略を見抜いていたことを知り、諸葛亮を殺さねばとの思いを強くします。そこで、「草船借箭の計」を仕掛けます。

(本文抄)

周瑜は軍議を開くからといって諸葛亮を呼ぶと、諸葛亮は喜んでやって来た。周瑜は諸葛亮にたずねた。

「もうすぐ曹操軍と戦おうと思いますが、水上の戦いでは、どんな武器が役にたつでしょうか」

「広い川の上ですから、弓矢がいちばんです」と諸葛亮。

「じつは私も、そう思っております。しかし、今、わが軍には矢が足りないのです、ご苦労ですが、先生のお指図さしずで十万本の矢を作っていただけませんか。まげてお願いいたします」と周瑜。

「都督のご依頼とあらば、喜んでお引きうけいたしましょう。十万本の矢はいつご入り用なのですか」と諸葛亮。

「十日以内に、調達できますか」と周瑜。

「曹操軍がすぐにも攻めて来るというのに、十日もかければ大事を誤ります」と諸葛亮。

「では、何日あれば調達できますか」と周瑜。

「三日あれば、十万本の矢をお納めすることができます」と諸葛亮。

「『陣中に戯言なし』ですぞ」と周瑜。

「どうして冗談なぞ申しましよう。起誓文を書きましよう。三日で調達できなければ、いかなる重罰も受けましよう」と諸葛亮。

(※周瑜は、わざと矢をつくる仕事を遅らせるようにし、魯肅に諸葛亮の様子を探りに行か  
せませす)

魯肅が諸葛亮に会いに行くと、諸葛亮は言った。

「子敬どの、私に二十隻の船をお貸し願いたい。一隻ごとに三十人の兵士を乗せて、どの船にも幔幕を張りめぐらし、千束ほど乾し草を船の両側に並べてもらいたい。三日目には必ず十万本の矢をそろえてみせましよう」と諸葛亮。

魯肅は帰って、諸葛亮は矢竹・羽毛などの材料はいらないといっているだけで、周瑜に報告した。周瑜は首をひねりながら、「三日後、彼はどんな返事をするか、見てみよう」と言った。

さて、魯肅は快速船二十隻、一隻につき三十人の兵士および幔幕・乾し草などを準備して、諸葛亮から声がかかるのを待った。

だが、一日目も二日目も音沙汰おときたがなかった。三日目の四更（午前一時から午前三時の間）ころ、諸葛亮は魯肅を呼んだ。

魯肅はたずねた。

「どうして私を呼ばれたのか」

「いっしょに矢を取りに行くつもりです」と諸葛亮。

「どこへ取りに行くのですか」と魯肅。

「行けばわかります」と諸葛亮。

かくして二十隻の船を長い綱で繋つなぎ合わせ、北岸へ向かって漕ぎだした。

その夜は深い霧がたちこめ、長江の中ほどは一段と深い霧がたちこめ、向きあう相手の顔も見えないほどであった。その夜の五更（午前三時から午前五時の間）、船はすでに曹操の水軍基地に接近していた。

諸葛亮は船を西から東に一列に並べると、太鼓を打ち鳴らし関との声をあげさせた。魯肅は驚いて言った。

「曹操軍が出撃して来たら、どうするんですか」

諸葛亮は笑いながら言った。

「曹操は、この濃霧では決して出撃して来ません。われらは酒でも飲んで楽しみ、霧が晴れたら帰りましょう」

一方、曹操の本陣では、太鼓の音と関の声が聞こえてきたので、毛玠もうけいと于禁うきんの二人は慌てふためいて、曹操に急報した。

曹操は、

「濃霧が長江をおおう今、敵軍が急にやって来たところを見ると、伏兵ふくへいがいるに相違ない。軽々しく行動してはならない。射手をそろえて、思いっきり敵に射かけさせよ」

また、張遼ちやうりやうと徐晃じよこうに、それぞれ三千の射手を率いて川岸から援護射撃せよと命じた。

まもなく陸上の射手も到着し、両方で一万余りの兵士が全員、長江に向かって雨あられと矢を放った。

諸葛亮は船を旋回させ、今度は東から西に向けて矢を受けとめ、さかんに太鼓を打ち鳴らし関の声をあげさせた。

日がのぼり霧が晴れると、諸葛亮は船をまとめて、急いで引き返した。二十隻の船の両側には、積んだ乾し草いっぱい矢が突き刺さっている。諸葛亮は兵士に声をそろえて叫ばせた。

「丞相、ありがたく矢をいただいた」

諸葛亮の船団はすでに遠ざかっていて、追いかけても間に合わなかった。曹操は無念の涙をのむばかりだった。

さて、諸葛亮は船を返しながら、魯肅に言った。

「一隻ごとに、おおよそ五、六千本の矢が刺さっています。少しの力も費やさずに、十万あまりの矢を手に入れたのです」

「どうして今日こんなに深い霧になると、お知りになったのか」と魯肅。

「将たる身で、天文に通じず、地の利を識らず、奇門を知らず、陰陽を暁らず、陣の構えを見抜けず、兵の備えに明るくなければ、役に立ちません。私は三日前にすでに今日、濃霧が発生することを予測していました。だから、三日の期限を切ったのです」と諸葛亮。

魯肅はつくづく感服した。

諸葛亮が船上の矢を抜き取らせるところ、十万本以上あり、これをすべて周瑜の本陣に運び込ませた。周瑜は大いに驚き、ため息をつきながら言った。

「孔明の計略は、この世のものとは思えない。私などの到底及ぶところではない」

(解説)

周瑜は諸葛亮に、三日で十万本の矢を作ることを約束させ、「陣中に戲言なし」と誓約書を書かせて、これを盾に諸葛亮を殺そうと謀りますが、今度もまた諸葛亮にしてやられます。諸葛亮は天文に通じ、すでに三日後に霧がでることを予測していたことにしています。

この「草船借箭の計」はフィクションですが、このもとなつた出来事が『三国志』には書かれています。

「赤壁の戦い」の五年後、「濡須江の戦い」でのことです。

濡須に砦を築いて曹操軍と対峙した孫権は、大船でみずから偵察に出ます。それを見た曹操は弓と弩で激しく射かけさせ、孫権の船は矢がいっぱいに刺さつて、その重みで傾きかけます。そこで、孫権は船を反対に向けて矢を受けると、船は元どおりになり自陣へ引きあげた(『三国志』呉主伝の注「魏略」せりやく)。

この孫権の記事が、「草船借箭の計」のモデルになっています。

「草船借箭の計」では、諸葛亮が一体どのようなようにして矢を調達するのかと読者の興味きょうしゆを引き、そのぼやけた実体をしだいに鮮明にさせるといふ手法で、劇的效果を發揮しています。このやり方は、『三国志演義』が諸葛亮の智略を描く際の常套手法じょうたうしゆになっています。